

京都大学	博士（地域研究）	氏名	安田 慎
論文題目	現代イスラームにおける宗教ツーリズム ーシリア・シーア派参詣を中心にー		
（論文内容の要旨） 本論文は、シリアにおいて 1970 年代以降に盛んになってきたシーア派聖地への参詣（シリア・シーア派参詣）の発展に焦点を合わせ、ツーリズムがそのなかで果たしてきた役割を明らかにしようと試みるものである。本論文は、3 部 9 章と序章・終章から構成されている。 理論編とも言うべき第 1 部は、本論文の前提となる概念・議論を検討したうえで、「宗教ツーリズム」という分析概念を提唱する。第 1 章は、イスラーム世界の参詣に関する研究の議論を整理する。そのうえで、近代化に伴う参詣活動の発展はツーリズムと関わりがあるにもかかわらず、肝心のツーリズムの概念が不明確であるとして、ツーリズム研究の不備を指摘する。続く第 2 章は、イスラームとツーリズムの関係に関する議論を整理する。そのうえで、ツーリズムは、従来イスラーム的価値を減退させる活動として忌避されてきたが、後にむしろイスラームの発展に欠かせない活動であるという認識が生まれ、両者の関係が親和的に変化したと指摘する。 第 3 章は、第 1 章において不備を指摘したツーリズム概念に焦点を合わせ、先行研究を整理したうえで、イスラーム世界の参詣にまつわるツーリズムを「宗教ツーリズム」という分析概念で理解することを提唱する。この「宗教ツーリズム」は、「宗教的な場を対象とした人の移動を促す市場システム」と説明される。この分析枠組によって、従来別の次元で論じられてきた参詣活動とツーリズムを、同じ次元で論じることが可能となる。この理論的枠組のもとに、第 2 部・第 3 部の議論が展開される。 第 2 部は、シリアにおけるシーア派参詣の形成過程をたどりつつ、宗教ツーリズムのシステムを探る。第 4 章は、研究対象であるシリアの概要を、宗教宗派のネットワークとコミュニティの関係から描き出す。 第 5 章から第 7 章までは、宗教ツーリズムの担い手に順次焦点を合わせていく構成をとっている。第 5 章は、国際的なシーア派のネットワークに焦点をあて、宗教ツーリズムにおける宗教活動について、シリア・シーア派参詣地の成立との関係から解き明かす。シーア派ネットワークは 1970 年代以降にシリアに進出し、拠点形成のための宗教投資（寄進等）を行っていった。この一連の活動が、参詣地を発展させると同時に、参詣地における宗教活動をシステム化してきたと指摘する。第 6 章は、観光行政に焦点を合わせ、その観光戦略によって、シリア・シーア派参詣がシリア観光の核にまで押し上げられたことを論じる。続く第 7 章は、イスラーム旅行会社に焦点をあてて、シリア・シーア派参詣が産業化していく過程を描き出す。 第 3 部は、宗教ツーリズムの特徴とその影響を、表象と宗教実践というふたつの側			

面から論ずる。第 8 章は、シリア・シーア派参詣地が 1970 - 80 年代にもっていた「抵抗の歴史」という歴史表象が、1990 年代以降、宗教ツーリズムの浸透に伴って「イスラーム文明の歴史」という表象に変容したことを論じる。第 9 章は、宗教実践における宗教ツーリズムの役割を検討する。宗教ツーリズムの発展が、宗教実践の実施法や見方をシステム化していくなかで、その宗教実践が簡潔化や可視化といった規格化の動きを強めていくことを明らかにする。この、規格化・可視化・簡潔化こそが、現代シリアにおいて宗教ツーリズムが果たす役割であると本論文は結論づける。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、シリアにおいて 1970 年代以降さかんになってきたシーア派聖地への参詣を、さまざまなアクターの交錯する場として描きつつ、そこでツーリズムの果たしている役割を考究するものである。シリアは、イスラーム諸宗派のなかでもスンナ派が 7 割以上を占める国であり、そのなかでシーア派聖地参詣が隆盛している現状を明らかにするには、それなりの説明を要する。本学位論文申請者は、「宗教ツーリズム」という分析概念を提示することによって、この課題に果敢に取り組んでいる。

本論文の学問的貢献は、以下の 4 点に集約することができる。

第 1 の学問的貢献は、きわめて貴重なフィールドデータを提供している点である。本論文は、2011 年 3 月までの合計 1 年程度の臨地調査に基づいて書かれている。周知のとおり、2011 年 3 月 15 日にシリアにおいて政治的混乱が始まり、政権の趨勢は予断を許さないものとなっている。政権が崩壊すればもちろんのこと、そうでない場合ですら、混乱以前のシリアの状況は激変を免れないであろう。本論文の第 2 部・第 3 部の全 6 章（第 4－9 章）は、激動直前までの、二度と得ることのできないデータを提供しており、高く評価されるべきである。

第 2 の学問的貢献は、複眼的な新しい視点の採用である。シリアにおけるシーア派参詣の現場には、さまざまな担い手関わっている。宗教界、行政、観光産業、参詣者などが、それぞれの意図と利害をもって参画している場なのである。申請者は、これら担い手の織りなすネットワークを、第 5－7 章において、焦点を変えつつ描いている。この際、宗教ツーリズムを担うイスラーム旅行会社をこのネットワークの核に据えて考察したのは、申請者の独創的な視点として高く評価できる。本論文の結論は、「宗教ツーリズムが参詣活動の規格化を図り、その規格を、簡潔で目に見える（簡潔化・可視化）参詣活動という、宗教サービスの提供側・需要側の双方によりわかりやすい形で提示してみせることによって、今日のシリアにおける参詣活動の隆盛が可能となった」とまとめることができるが、これはイスラーム旅行会社を核とするネットワークを描くことによって初めて導き出されるものである。

第 3 の学問的貢献は、明確な概念規定に基づく理論化の試みである。本論文では、第 1 部全 3 章（第 1－3 章）が、先行研究の整理と概念規定にあてられている。先行研究を潮流別に着実に整理し、その問題点を踏まえたうえで、申請者独自の「宗教ツーリズム」という分析概念を理論枠組みとして提示しているので、その主張は説得力を増している。

第 4 の学問的貢献は、上述の「宗教ツーリズム」という分析概念の秘めるさらなる可能性である。現状では、シリアにおけるイスラームの参詣のみを説明しうる概念に留まっているが、さらに改良を加えれば、イスラームのみならず、広く世界の巡礼・参詣に適用しうる可能性をももつと考えられる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 1 月 26 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と

認めた。